

報 館 書 圖



★ 第64号

★ 兵庫県立三木東高等学校 総務部 発行

「私と読書とキャリア、

つれづれ。」

私の本との関わりは、熱帯地域の雨季と乾季のように、猛烈に読書する時期とほとんど読まない時期とがはつきりしていて、1年においても、これまでの50数年の人生においても、それが不定期的に繰り返されてきたような気がする。つまりは気分屋なのだ。

私の家の本箱には、ローンで買った重厚な古典全集から種々のハードカバー、文庫本に至るまでが、まずは2列に並び、その上には場所取りに敗れた本が積み上げられ、それがやがて上段のしきりに達するまでぎゅうぎゅう詰めになっている。だから久しぶりに本を読み返したくなつた時には、まずそこからお目当ての本を引っ張り出すという重労働から始めなければならぬ。ちなみに本箱は4つある。そんな具合だからもう1つ新しい本箱を買えば一件落着するのだろうが、狭い家にまだこれ以上本箱を置くのかという家人の冷たい視線があつて、怖くてと

ても言い出せないでいる。

さて、今回は「図書館報」に寄稿するという名誉な機会をいただいたので、試しに今私の第1書庫第2段目に並べられた本のタイトルを、右から順に読み上げてみる。「宣戦布告(上)(下)」、「町奉行日記」、「仕事の危機管理術」、「参謀は名を秘す」、「ビタミンF」。5冊挙げたが、本の形状もジャンルもまさにカオス、おもちゃ箱。気分で片っ端から本を買い漁っているところなる。

私の読書は、ご多分に漏れず幼少期の絵本に始まり、小学校時代は3冊の図鑑に夢中になった。昆虫図鑑と動物図鑑、それと世界図鑑である。いずれもしつかりとした装丁で、中でも私は世界図鑑に惹かれた。表紙見開きには世界の国旗が所狭しと並べられ、ページを繰ると各国の首都や名所が主にスケッチ画で描かれていた。読書の醍醐味の一つに疑似体験があると思うが、世界の首都や美しい風景は私を魅了し、いつまで眺めていても飽きなかった。夜布団に入ってから、雪を頂いたアルプ

スの山並みや神秘的なオーロラに包まれて眠った。いつかは現地を訪れてこの目で見たいと願ったが、それから50年が経ち、実現したのは未だにワシントンD.C.のみである。現実は厳しい。

そんな昔話とはかく、キャリア教育を推進する総合学科の校長として、少しはそれらしいことも書いておきたい。私は実は、読むことよりも書くことの方が何倍も好きな少年であった。小学校に入学してからは、教科書の詩に心を奪われ、見よう見まねで自分でも詩を書いていた。それを時々担任の先生に見せて、大きな花びらつきの三重丸をもらつては、それが嬉しくてまた新しい詩を書いた。

小学6年生の時、とうとう教科書の詩だけでは満足できなくなり、貯めたお小遣いを握りしめ、一人で播但線に乗って、1時間かけて姫路の新興書房という大きな本屋へ向かった。本屋に着くと一目散に文学書の島へ駆け込み、そこで手にしたのが「現代名詩選(上)(中)(下)」(伊藤信吉編 新潮社)という3冊の文庫本だった。1冊が3

00頁余り、定価は240円だった。その本は今も私の手元にある。上巻の最初に登場する詩人は、言わずと知れた島崎藤村。その巻頭を飾る詩が「初恋」だった。「まだあげ初めし前髪の」で始まる文語体のその詩は、小学生の私にとっては意味もよくわからなかったが、その切ない叙情だけは感じとれた。以来私はその3冊の詩集の虜になり、それを座右に置いて中学、高校時代を過ごし、大学は文学部を志望するようになっていた。結果としてそのことが国語教師への道を拓き、現在の私につながっている。今思えば、この3冊の詩集こそが未来への暗示であり、私のキャリアを運命づけたようでもある。

「久しぶりに小説を読んで」

電車通学をしていた学生時代以降、長期に渡ってほとんど本を読むことはなかったのですが、最近たまに図書館に行き数冊借りてくることがあります。ところが2週間の期限内に読み切れず延長し、それでも読めず度々そのまま返却しています。今本を読もうとすると気づけば意識がなくなっています。寝付きが悪い夜は、本を開くとすぐに睡魔が襲います。夜は目が疲れて、文字も見えずづらくなりました。

昨年知り合いにノーベル文学賞作家のイシグロカズオさんの「日の名残り」という小説を借りました。小説を読むのは久しぶりで、イギリスの地名や登場人物の名前など聞き慣れない言葉が多く、なかなか物語に入り込めず繰り返し同じページを読みました。もうあきらめてそのまま返そうかと何度も思いながら、そのうちすつと話に入り込める時がきて、その後は割と時間をかけずに読み終えています。

登場人物について容姿や心情をイメージし、後からじわじわと湧き上がってくる感動を久しぶりに味わうことができました。想像することは本を読むことの良さの一つだと思います。昔小学校の先生に、教科書の行間から登場人物の気持ちを想像して読みましようと言われたのを今でも覚えています。映画やドラマにはない自分だけの映像を思い浮かべ、登場人物の心情を自分なりに考えてみることは、日常生活においても様々な場面で想像力を働かせることに、少しは役立つのではないかと思っています。

後日イシグロさんの小説が映画化されていることを知り、映画を見たのですが、登場人物は私が思い描いたイメージとかなり違って少しかかりました。

①

「本との共生」

「書籍には、間違はなく人類の知恵がつまっているものであるが同時に毒も盛られているのである。本から離れられない人間は、その毒に魂を吸われているものである。」

これは『100万回生きたねこ』で有名な佐野洋子の『問題があります』というエッセイの一節である。これを読んだ高校生の私は「なるほど、本から離れられないのは仕方がないことなのか。」と妙に納得したのを見て、実をいうと、物心が

ついた時から本を肌身離さず持ち歩くような子どもで、初めて持ち歩いていた本は美味しそうなパンの絵が紙面いっぱい広がっているかきさとしの『からすのパンやさん』という絵本だった。

教員になった今でも、私のカバンの中には必ず本が二冊入っている。その二冊とは、仕事に関連する専門書と、完全なる娯楽を目的とした小説や詩集で、仕事に行く時でも、友人と会う時でも、いつでも入れている。では、その二冊を必ず読んでいるのか、と問われれば読んでいない時もあり、ちよつとした筋トレになつていることもしばしばある。しかし、二冊入れておかなければ落ち着かず、二冊入っていない場合は必ず書店か図書館で30分は過ごしている。やはり、「その毒に魂を吸われている」のであろう。それでもなお、本を開き、少しでも人類の知恵や美しい言葉に触れることは私にとって至福の時であり、これからもその毒に浸りたい。

「君の蔵書を読みたい」

「趣味は？」「読書です。」「へえ、どんな本を読まれるんですか？」『鬼平犯科帳』って分かりますか？「分かるも何も大好きですよ！」「ええ、そうなんですか！？」「血頭の丹兵衛」良いですよね！」これが、後に私の家内となる女性とのお見合いでの最初の会話でした。その後、彼女（現家内）が横溝正史と宮部みゆきが好きと知った私は、図書館に駆け込んで横溝正史と宮部みゆきを読み漁り、次のデートでは早速その感想を語り合い、意気投合した二人は無事、華燭の典に到りました（よく考えたら、「助清、仮面を取つておやり」とか「鶴の鳴く夜に気を付けろ」で盛り上がるカップルってどうなんでしょうね・・・）。さて、ふと考えると、私の読書遍歴は、常に同じ様な不純な動機によるものが大半でした。高校一年の時は、図書委員長のお姉さんに恋をし、そのお姉さんが遠藤周作を読んでいるのを見るや、図書館で遠藤周作をひたすら読み漁りました。高校二年の時にク

ラス一の才媛が山田詠美を読んでいるのを見るや、お近づきになるべく、図書館で山田詠美と『孫子』『戦争論』を読み漁りました。結局、高校時代の私の恋愛は成就することなく終わるのですが（語るも涙、聞くも涙のこれらの恋愛談を聞きたい方は池田まで）、高校時代に読み漁ったこれらの読書体験は、今でも私の貴重な財産になっています。読書を始める際に「人生で役立つ」とか「成績が上がるため」とかといった大義名分はいりません。「おもしろそう」「女の子にモテたい」といった理由でも良いんです。まずは、図書館で本を手にとってみてください。きっと、新しい世界が広がると思えますよ。

「人を映す鏡」

この原稿依頼をいただいたことをきっかけに、改めて本棚を眺めてみると、人生の軌跡も見えた気がしたのでここで紹介したい。

①漫画・高校卒業まで、本棚は漫画で溢れていた。王道が苦手なひねくれ者だったので、マイナーな漫画が多い。②ミス터리・サスペンス系小説…片道100分の大学への通学が始まり、活字の本を読み始める。ここでは東野圭吾や海堂尊などの王道が多い。③歴史書…大学受験が一段落し、一般書の世界史関連の本を読む。本を読む習慣があまりなかったのでかなり苦戦した思い出。④音楽理論書…大学生活はドラムとバンド活動に没頭していた。ドラムは音階がないので、その劣等感からか理論書が増えた。だが理論書だけでセンスは磨かれないので作曲は今もできない。⑤自己啓発書…大学卒業前後から読み始める。人生に迷っていたのかもしれない。そんな時、本を紹介してくれる親切な人に出会い、有名ど

ころを読み漁った。紹介してくれた本には良書が多かったが、後にその人はネットワークビジネス（マルチ商法）の勧誘者であることが判明した。残念。⑥棋書…二十代半ばに将棋を始める。棋書は将棋の戦法を符号（▲7六歩など）で解説した特殊なものなので、これを読書と呼んで良いのか疑わしい。最も本棚のスペースを占めている。

③

本棚はその人を映す鏡と言われる。みなさんも本を読むといつか自分の人生を振り返る契機になるかもしれない。

「本嫌いだつた私が…」

本嫌いだつた私が唯一読んでいたのが、星新一さんの作品でした。

ショートショートの様と呼ばれ、短時間で読み切れるもの向いていたのかもしれませんが、SF作家でもあり科学的な作品も多く、近未来はこのようなことが出来るのか？と興味を持って読んだのを覚えています。

今、考えてみると数十年前に書かれていたことが“空想の世界”から“現実の世界”へと実現したものも多いと思います。

次に、人生を一変させた作品が『Vとヨに泣く』です。高校一年のとき、数学の先生に勧められた一冊です。確か会話文で数学に関する間違えた考え方を検証する作品だったと思います。現在の大学入試でも採用されている会話問題の先駆的な作品だったと思います。今まで正しいと思っていたことが、間違えに気付かせ、正しい方向に導くように考えさせてくれる作品でした。

その作品が人生を一変させた

のかいとうと、読み終えた後に“数学”の魅力に取りつかせてくれた作品だったからです。その後も『零の発見』ではインドで発見された零の話や、『数学概論』では実数の連続性に魅力を感じ、‘数学’の世界へ導かれた作品ともいえます。（この時点では難しすぎ最後まで理解できなかったのも覚えています）

本嫌いの私が、まさか一冊の本で人生が変わるとは思っていませんでした。皆さんも人生を変える一冊に出会えるかもしれません。

④

「印象に残っている本」

私にはこれまで読んだ本の中で、印象に残っている本が二冊あります。

一冊目は、私が小学生の頃に読んだ「中村俊輔」という本です。ご存知の方も多いと思いますが、サッカー選手について書かれた一冊です。読み始めたきっかけは読書感想文を書くためでしたが、途中からは読書感想文のことなど忘れてしまうほど夢中になっていました。読み終える頃にはすっかり中村俊輔選手のファンになり、本の中に登場していた練習法をどンドン実践するようになりました。私が今でもサッカーをし続けるきっかけになった本だと思っています。

二冊目は、町田そのこさんの「52ヘルツのクジラたち」という本です。この本を読むまでこういった長編小説を読むことがほとんどなかったのですが、とても印象に残っています。悲しい内容が多い一冊でしたが、その分考えさせられることも多く、初めて本を読んで涙を流しまし

た。本を読むことによって、相手の気持ちや理解できるようなったり、感受性が豊かになったりするということを実感しました。

皆さんも是非印象に残る本を見つけてみてください。

「はじめの一步」

みなさんは「本を読みなさい」と言われたときに、どのような「本」を指していると感じますか。わたしは長い間、大人の言う「本」というのは、少し昔の人が書いた、いわゆる「名作」のことだと思っています。あるとき、その「名作」のうちの一つを読もうと本を購入し読み始めましたが、ちっとも読み進められません。言葉は古めかしいし、時代背景は古くイメージがつかめませんでした。わたしは一旦読むことを諦めて、当時話題になっていた本を読むことにしました。これは読みやすい。言葉もわかりやすく、書いてある文字を映像として頭の中に描くことができる。話題の本を一気に読み終え、勢いづ

いたわたしはもう一度「名作」を手に取りました。今度は、その作者の生きていた時代をある程度イメージしてから読みはじめました。ふむふむ、今度は読み進められる。そこには現代を生きる人たちにも共通した人間の行動や感情がありありと表現されていました。

普段あまり本を読まない人が本を読もうと思うとき、必ずしもはじめに手に取るものが「名作」である必要はないと私は思います。まずは今の自分にとつて読みやすそうなものから始めて、いつか「名作」も読んでみるとよいでしょう。無理をすると、きっと私のように途中で諦めてしまうことになります。また、いくつかの作品を読んでいくことで、名作の名作たるゆえんをより深く感じられるのだと思います。

「図書館の思い出」

私は学生時代、ほとんど図書館に行ったことがありませんでした。行くことがあるとすれば、放課後に掃除当番でいくことが

あったぐらいです。しかし、社会人になり、図書館に頻繁に通うようになりました。目的は本を読むのではなく、勉強です。毎日地域の図書館内にある学習室に通い、朝から夕方まで勉強をしていました。

通うようになると同様の方が勉強している事に気づきます。テスト勉強をしている学生や資格検定の勉強をしている社会人、仕事関係で絵を描いている方もいました。その中で話が合い、今では友人として付き合い合っている方もいます。

みなさんは図書館といえれば本を読むところと思う人が多いと思います。しかし、たくさんの方が様々な目的をもって行くところだと私は思います。あまり図書館に行ったことがないという人は一度行ってみてはどうですか。思いもよらない発見があるかもしれません。

「本を読み、人と出会う」

幼い頃は、寝る前にお気に入りの絵本を読み聞かせてもらった。小学生の頃は、NARUTOを読み忍者に憧れ、忍術の練習をした。そんな具合に、私にとって身近な本は絵本や漫画であり、例えば小説のような活字のみの本を手にとる機会はほとんどなかった。

大学生になると、私と本の関係性は随分変化した。どこかの大学教授が書いた本や、バスケットボールのマネジメント本を手にとるようになった。

私は、さらに知識を深めたいと思ったとき、ほかにどんな考えがあるか知りたいときに本を読むようになった。

本を読むと、他者の考えを知ることができた。その他者とは、多くの場合これからの人生で直接出会う機会がない人。大昔を生きた人や、遠く離れた場所に住む人だったりする。

本は会うことのできない人とさえ会うことができる、人と人が出会う場所なのだ。

「本を読み人と出会う」その

経験は人生を広く深く広げてくれるかもしれない。

身近には、想像を超えるほどたくさんのお出合いが待っている。ぜひ、広い世界に飛び出して出合いを探しに行ってみよう。皆さんはこれからどんな人と出会うのか。楽しみだ。

⑤

「オトナになって読む絵本」

かつての教え子が、私の家に遊びに来るとき、いつも絵本のお土産を持ってきてくれました。その中に、ヨシタケシンスケさんの『りゆうがあります』という1冊がありました。「ちがうんだよ、鼻くそほじるのも理由があるんだよ」と自分勝手な言い訳ばかりする話ですが、とにかくその言い訳がおもしろい。

本屋には、ヨシタケシンスケ

⑥

シリーズがいっぱいあって、気が付けば何冊も買ってしましました。その中で、高校生のみなさんにおすすめなのが『ころべばいいの』です。「あんなやつ、ころべばいいの！」と思っていたら・・・という話。世の中、腹立つこともあるし、どうにも気が合わない人もいます。そんな時に、どうやって自分の中で整理をするか。これはオトナでも、いやオトナだからこそ必要なスキルではないか。それを教えてくれる絵本です。一度、読んでみてほしいです。

⑦

そして、もつとオトナになって、親になり子育てに疲れた時には、『あんなに あんなに』をぜひ。反抗期の我が子と対峙してヒリヒリしていた私の神経を鎮めてくれました。

絵本は子どもの読み物と思っただけですが、こうして、私はオトナになってから、自分のために再び読み始めました。子供時代と違って、自分で選んで好きなだけ絵本を買えるのがまた喜びです。本を読むのが苦手な人も、まずは絵本から読んでみませんか？

「代本板」

「図書館の思い出」と聞かれて思い返したとき、一番に浮かんだのは「代本板」でした。皆さんも利用していたのではないのでしょうか？青色の学年カラーに名前の書かれた代本板。小学校にいた六年間、それは常に図書室のなかにありました。読みたい本を見つけたらその本を手にとり代本板を代わりに入れる。借りた本を読み終えたら、代本板と本を入れ替えて次の一冊を探す。それが図書室での当たり前の光景でした。一冊一冊読み終えていく達成感、六年間で何百冊もの本を読んだように思います。そして、本と木のおいが漂う図書室という空間が好きでした。

当時、一番好きだった本は「子ども伝記ものがたり」のシリーズです。ナイチンゲールやコロンブス、ライト兄弟など世界の偉人の人生を知り、「自分も将来こんな風になれるかな。なってみたいな。」と自分の未来に思いを馳せたことを今でも覚えています。

⑧ 今、手にとる本は、仕事に直結するような福祉や介護に関するものか、皆さんに読んでほしいなと思う紹介本のようなものが多いです。改めて考えると、物語に没頭することや時間が本当に少なくなつたように思えます。この原稿を書く機会を頂いたのは何かのチャンスかもしれませんが。昔のように物語の主人公の気持ちになつて、泣いたり笑つたりしながらその世界に入り込める、一人の静かな時間をとろうと思つています。皆さんもそんな時間をたまには作つてみてください。

⑨

⑩

編集後記

この図書館報は、昭和五十五（一九八〇）年六月一日に創刊し、今年で四十三年目を迎えました。

毎年、新着任の先生方に原稿をお願いし、図書館報をつくっています。今年度は十二名の先生方に執筆していただきました。今年度も先生方のご協力のおかげで無事に図書館報を発行することができました。興味深い内容ばかりですので一読いただきたいと思います。それでは、新着任の先生方の寄稿をお楽しみください。

一学期は勉強をする場、読書の場として活用していただきました。「また行きたいと思える図書館」を目標に、引き続き図書委員と活動を続けていきます。毎月発行の Library も「楽しみにしています」というお声をいただきます。ありがとうございます。最後に、ご多忙な中、原稿執筆していただいた先生方、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

⑪

⑬

⑫

⑭